

殿村遺跡とその時代Ⅶ

— 平成 28 年度発掘調査報告会の記録 —



2018

松本市教育委員会



殿村遺跡と虚空蔵山



殿村遺跡第1次調査 平場と石垣



虚空蔵山城跡第3次調査 石垣



金子家多宝塔



矢花家宝篋印塔



川久保家宝篋印塔

目 次

目次	
口絵	3
目次	4
例言	4
発掘が語る虚空蔵山麓の中世	5
殿村遺跡を特徴づける遺物	15
古文書と石造文化財が語る四賀の中世	24

例 言

- 1 本書は、松本市教育委員会が主催し、平成 29 年 3 月 18 日(土)にビナスホール(松本市役所四賀支所 1 階)で行った「殿村遺跡とその時代Ⅶ～平成 28 年度発掘調査報告会～」の内容を取録したものである。
- 2 本文は、松本市教育委員会が録音したものを文章化し、発表者が加筆・修正を加えた。
- 3 挿図は、当日の配布資料、スライドから再構成し、発表者が指示の下、必要により加除した。
- 4 本書の編集は、文化財課史跡整備担当が以下の作業分担任で行った。
文字おこし・挿図・本文編集(DTP)：廣田 早和子、総括：竹原 学

発掘が語る虚空蔵山麓の中世

松本市教育委員会文化財課 竹原 学

はじめに

文化財課史跡整備担当の竹原です。今回の報告は、これまで調査を重ねてきた殿村遺跡と虚空蔵山城跡、それを地域の信仰空間の中でどう捉えるかという、まとめた話です。

はじめに図1を見てください。もう皆さん見慣れた光景だと思います。会田の町と背後にそびえる神々しい虚空蔵山という画です。この風景のなかに殿村遺跡があり、そこから見下ろして、あるいは西の対岸に鍵の手に連なる会田の町、すなわち旧善光寺街道の会田宿があります。こうした景観の中で私たちは調査を重ねてきました。

最初、平成20年の発掘では図2のような立派な石垣を伴った室町時代の大規模な造成遺構が出土しました。当時、これが会田氏の館跡ではないかとセンセーションになり、それがきっかけで地元の皆さんのご要望を受けて遺跡の現地保存を決定するに至ったのです。まさに調査の出発点はそこにあったのですが、この遺跡を調査指導委員会ははじめ多くの識者に見て頂いたところ、むしろ先の写真に象徴されるように虚空蔵山から会田の一带には宗教的な景観が見いだせ、その空間の中に遺跡を位置付ける必

要があるとの見解となりました。遺跡の内容をみても、出土した遺構や遺物は武家の居館跡というより寺院などの宗教施設の可能性があるのではないかとの見方が有力になったのです。そのことに対し、居館跡ではないことを残念がる声もあったのですが、実は中世の宗教勢力というのは武士以上に大きな力を持っていて、会田盆地ならばここを政治的に治めていた会田氏とも関わりながら一定の勢力を保っていたと考えられるのです。中世の宗教勢力は非常に高度な土木技術を保有しており、また喫茶と茶道具、建築技術など、中国から先進的な文化を受け入れています。宗教勢力というのは庶民の信仰を背景にもついでい力を持っていたということが分かります。そうした宗教的背景の中で殿村遺跡を中世の寺院遺跡と理解すると、遺跡はもっと広がりを持っている可能性があり、実際に周辺の地形を見ると方形の離壇状の地割があちこちに見られます。そこで、保存が決定した遺跡の将来的な活用を視野に、最初に姿を現した石積みのある平場の構造をさらに詳しく探るとともに、平場で構成された遺跡の広がり確かめるため、平成22年度から新たな次計画の下に発掘を進めることになったのです。



図1 虚空蔵山と会田宿



図2 殿村遺跡第1次調査 石垣

殿村遺跡の造成跡と寺院との関わり

私たちは、平成20年の調査から数えて、これまで8回の調査を実施してきなかで、図3のような中世の大規模な平場跡を5か所で確認することができました。その確認地点は図4のとおりで、まだ調査が及ばない場所がたくさんあるのですが、地形や明治の地割図を見ていくと同じような造成跡がタイルを並べたように広がっていたのだらうということが分かってきました(図5)。その範囲はおおよそ南北300m、東西250mに達します。

これだけ大規模に平場が連なる遺跡というのは、仮に武士の居館とすると有力な守護大名や戦国大名など、よほどの権力者じゃないとないわけですし、例えば先だって史跡指定にこぎつけた小笠原氏の館である井川城跡は、堀で囲まれた四角い居館の長い一辺が130mです。当時一国を代表する守護クラスでほしい1、2町規模の館を構えるのが通例であったということになりますので、井川城跡はまさにぴったり当てはまるのですが、殿村遺跡は全体としてはそれをはるかに上回る規模です。もちろん最初に見つかった平場で一辺80mくらい、廣田寺が一番近いところで30m程度。さらに一昨年調査した長安寺本堂跡に至っては20m程と狭いのですが、こういった大小の平場がたくさん集まる姿は、やはり武士の居館とは言え、むしろ宗教施設に類例が求められるのです。その代表は福井県勝山市の白山平泉寺で、白山信仰の越前側の山麓拠点として知られる一大宗教都市とでも言うべき巨大な遺跡群です。その真ん中あたりにある中心的な伽藍の周囲にはこの寺院に関わる大勢の僧が構えた坊が軒を連ねるように配置されており、しかもそれらが無数に集まって広大な都市のような景観になっている様子がうかがえます。この無数にある僧坊の一角が図6で、縦横に配置された道で区割りされた中に大小の平場が造られている。それぞれの平場は石畳と土塀で囲まれ、道に面して門が造られています。これを現地で実際のものを見ると図7のような雑壇状になっていて、現在は史跡整備により公園になっていますが、石畳の道路脇には石組みの側溝があって、石畳で縁どられた平場が連なって造られています。

殿村遺跡の場合は、まだ中心の伽藍と僧坊の関係がはっきりしませんが、遺跡の景観としてはこのような姿がイメージされます。ちなみに、図8が武士の典型的な居館跡です。同じ福井県にある有名な一乗谷朝倉氏遺跡の朝倉館ですが、ここではやはり一辺100mの方形居館の中に御殿とか、普段の生活空間である常御殿とか、あるいは会所や庭といった施設が計画的に配置され、屋敷の前半には広場空間、その手前に門があります。ここでは戦国時代の守護大名の居館として、防衛のために周囲を土塁で囲み、さらに水堀を巡らせていますが、このような構えが武家居館の典型的な姿なのです。殿村遺跡の場合はまだ遺跡の部分しか見えていないので、ここまでイメージを膨らますのは難しいのですが、白山平泉寺のような坊跡が累々と連なるような寺院遺跡の姿を描くことが最もふさわしいと考えられるのです。

その平場ですが、中世の大規模な土木工の跡を見てとれます。まず室町時代には先端技術だった石垣を構えた斜面の切り盛りによる平場を造成しているのですが、平場をトレンチ調査で断ち割ってみると実に分厚く盛土がされています。図9は最初の調査地点の平場ですが、ここでは1.5mもの厚さの盛土がされています。その断面を観察すると、一気に土を盛り上げるのではなく、少しずつ土を敷きならしては突き固めるという非常に丁寧な造り方をしていることが分かります。こうした高度な土木技術によって一つ一つの平場が造成されていたのです。そしてさらに驚くことに、およそ100年~150年くらいの間に何回も造成を繰り返して次第に拡張していった結果、地面が少しずつ上昇して重層し、複雑な姿になっていきました。

坊跡と考えられる平場跡が複数集まって一つの寺院景観を形成している遺跡を、もう一つ紹介しておきます。図10は岐阜と滋賀の県境にある有名な伊吹山です。滋賀県側の米原市ですが、その山腹に弥高寺と呼ばれる中世寺院跡があります。ここも中央の一番奥の高まりに中心伽藍があり、大きな礎石建ちの本堂がありました。そこに至る参道がまっすぐ中心線に通っていて、道の両側に20~50mほどの四角い平場が雑壇状に数多く造られています。



図3 殿村遺跡第1次調査 大規模な平場



図4 殿村遺跡 確認地点



図5 殿村遺跡 調査地点



図6 平泉寺僧房跡 (勝山市)



図7 平泉寺僧房跡 (勝山市)



図8 一乗谷朝倉氏遺跡 (福井市)



図9 殿村遺跡第1次調査 盛土



図10 伊吹山

これらのいくつかは発掘されていて、殿村遺跡や白山平泉寺の平場のように石垣が巡らされていたことが分かりますが、この遺跡も中心伽藍とそれをとりまく僧坊で構成された、規模こそ違うものの平泉寺とまったく同じような遺跡なのです。殿村遺跡もこうした寺院遺跡の一つとして理解していただけるかと思えます。

さらに寺院との関係を直接的にうかがわせる状況が3点あります。図11において丸囲みで示したところは、数年前まで茅葺きの本堂があった長安寺です。長安寺は会田氏の主導により鎌倉時代の終り頃、建長寺を開いた蘭溪道隆という高僧を招へいして開山したと伝わっています。それから図中左下の補陀寺ですが、ここは維新前まで寺院があって、廃寺後は会田小学校の前身である思誠館になりました。こゝも真言宗の寺院として歴史がさかのぼり、岩井堂観音が奥の院と言われています。さらに遺跡の北寄り、廣田寺のすぐ下に丸囲みで示したあたりは、かつて「糸ヶ」と呼ばれていたらしいことが、会田の大河内家に伝わる幕末の絵図の調査から分かりました。廣田寺もその中に含まれ、現在はうつつ沢と呼んでいる沢も「糸ヶ沢」と書いてあります。そこで気になるのが、「天正9年御説いくばり日記」に記された会田の「糸ヶ寺」です。これまで会田のどこに所在したのかまったく分からなかったのですが、他に同名の地名がないとすれば殿村遺跡の一角、一番北寄りの周辺にあった可能性が高くなります。

このように、殿村遺跡の周辺には3つの寺院があったことになるのですが、そうすると平場遺構と



図11 殿村遺跡周辺の寺院跡

の関係に俄然注目が集まります。残念ながらまだ直接的物証はないのですが、時代も場所も性格も重なる両者は決して無関係ではないはずで、常識的に考えれば、これら3か寺の遺構を私たちは発掘を通して見ている可能性が高いと言えるのです。

そこでさらに、先にも触れた中世の寺院勢力が持っている技術や保有している文物のうち、殿村遺跡で特徴的に見られるものを紹介します。まずなんといってもこの遺跡を特徴づける石垣です。これは15世紀中頃から後半に造られました。この15世紀という時代は、まだ武士が館や城に石垣を導入する以前です。15世紀の石垣といえば一般的には寺院に作る石垣というイメージがあるわけですが、殿村遺跡では惜しげもなく平場の岸、池や便槽の縁取りなどに使われています。石垣が殿村遺跡を寺院たらしめる最たる特徴と言えます。ではこの時期の武家の居館はどうか。身近な例である信濃守護小笠原氏の居館跡・井川城跡を見ると、堀で囲まれた館の土壇の縁取りには殿村遺跡のような石垣は見られません。井川城は平地の石の少ない地域に立地するため、敢えて遠くから石を運んできて石垣を造る必要もないとも言えますが、当時の武家の屋敷というのは、このように石垣はほとんど採用されなかったのです。図12は東京の八王子城、後北条氏が関わった城の山麓居館部分で、石垣がふんだんに採用されていますが、これは時代が下って戦国時代の終り頃です。すでに近畿地方ではもっと本格的な石垣が普及・発展してきている頃ですが、16世紀半ば以降にならないと武家の居館でも石垣を本格的に構える



図12 八王子子城跡(八王子子市)

ということにはなかつたのです。次に15世紀の寺院石垣の例です。図13が京都の銀閣寺境内の東山殿になります。図14は先に紹介した滋賀県の弥高寺です。こういった石垣と石の積み方が技術的によく似ていることから、殿村遺跡の石垣も15世紀の築造で間違いないと考えられます。

中世寺院の石垣

中世寺院の石垣は絵巻物にも登場します。例えば殿村遺跡よりももう少し古く、14世紀に制作された「法然上人絵伝」では石垣に縁どられた平場の上に建つ僧坊や、白山平泉寺のような石塁上に建つ土塀で囲まれた区画の中に建つ小堂が描かれています。殿村遺跡においても、雑壇状の平場の一つ一つに僧坊のような建物があった可能性があります。その遺構はなかなか把握が難しいのですが、そのいくつか

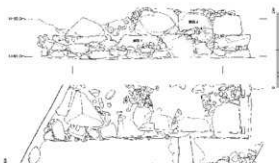


図13 銀閣寺旧境内(京都市) 石垣



図15 殿村遺跡第7次調査 礎石跡



図17 平泉寺僧房跡 復元された門

を紹介します。小さいものでは門に礎石が使われま
す(図15)。図16はかなり大きな建物で、お堂など僧坊を構成する主要な建物の可能性があります。こうした礎石建物が武家の居館に本格的に導入されるのは15世紀以降、信濃では一般的には15世紀の終り頃と言われています。

寺院における礎石建物の伝統は古代から受け継がれていて、中世では先に挙げたものなど絵巻物に登場する建物があります。白山平泉寺では出土した礎石建物跡が図17のように一部復元されています。松本地方で武家居館に関わる礎石建物というと、やはり井川城跡で出土しています。時期的には15世紀中頃までさかのぼるとみられ、当地域ではかなり古いものになりますが、基本的には礎石建物もまず寺院から導入が始まっているのです。

最後は庭池です。図18は長安寺跡から出土した

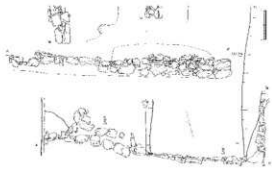


図14 弥高寺跡(米原市) 石垣



図16 殿村遺跡第1次調査 礎石跡



図18 殿村遺跡第7次調査 池

池の跡です。縁取りの石積や石列が四角四面ではなく、出入りがある曲線的な部分が見られます。平場の片隅にあり、明らかに庭園に伴う池と言えます。従って、この平場には池庭を伴った建物があったと考えられるのです。池の中からは奉納された可能性がある和鏡が出土していますし、また池の底の一部には装飾的な要素である黒い玉石敷きが見られます。こうしたあり方から、明らかに庭池と考えられます。

このような庭池や庭そのものといえば、武家の居館に特有なもので、庭を伴った屋敷構えが確立するのは15世紀後半頃からです。この池はもう少し古く、15世紀の初め頃の築造なので武家居館に先行する例と言えます。位置的に池の隣には何か建物があったはずで、平場の中央にお堂のようなものが建っていたと理解しています。ちなみに庭池のある中世寺院の例として広島県の万徳院があります(図19)。

殿村遺跡では他にも池と推定される遺構があります。それは最初の調査で出土した石垣ですが、調査を進めていくうちに、これが平場の南寄りにあった長方形の大掛かりな池の護岸であることが分かりました。これはおそらく、築造当初は平場に入る導入路に沿って築かれた石垣と土塁であったものを、後に東西両端を石垣でふさぐことで池に改修されたと考えられるものです。寺院の平場の端にこのような大きな池を構える例はほとんど知られておらず、現在でも遺構の性格については明確に断定することができないのですが、しいて例を挙げれば、善光寺大勧進の前にある大きな蓮池のような放生池と対比できないかと考えています。ちなみに鎌倉時代の絵巻



図19 万徳院跡 池(北広島町)

「一遍聖絵」などに寺院の境内に描かれた四角い放生池を見ることができます。このように寺院と池には非常に深い関係があったのです。

中世寺院に特徴的な遺構の話はこれで終りにして、次にそこから出土する遺物の話をします。まず殿村の出土遺物ですが、陶磁器の出土量が集落遺跡に比べ、圧倒的に多いことが特徴としてあげられます。とりわけ中国から招来された高級な焼物が目立ち、図20の天目茶碗は茶器としてもてはやされた最も高級な輸入品と言えます。もちろん、下駄や漆碗、播鉢や石鉢などといった普通の生活遺物もありますが、このような高級かつ希少な遺物が目立つということです。

そうした遺物の中に素焼き皿が非常にたくさんあり、焼物全体の4~5割を占めています。この素焼きの皿は食器や灯明皿として使うのですが、基本的には儀礼の時に使うもので、しかも、その場一回限りしか使わない穢れのない清浄な器なのです。従って、この皿がたくさん見つかるということは、そこで盛んに儀礼が行われたことを意味するのですが、実際に絵巻物にそうした場面が出てきます。こうした儀礼の器ですが、宗教施設においても法会や神事の時には清浄な白い素焼きのカワラケを使うのです。

次に、茶道具がたくさん見つかっています。例えば茶臼や茶釜をかける風炉、茶壺、茶入、そして最も多く見つかるものに天目茶碗があります。茶碗だけでなく、茶道具がひと揃い見つかるということは、ここで抹茶を飲む喫茶が行われていたということです。しかも喫茶の中でも抹茶をいただくのは武家



図20 殿村遺跡出土 中国産天目茶碗

の館や寺院に限られるのです。喫茶を日本に広めたのは栄西という臨済宗の高僧ですが、臨済禅において喫茶はとても重視されており、その流れが後々、千利休に代表される茶の湯に繋がっていくのです。他にも寺院に限ったものではありませんが、寺院といえば経を書いたり、文字を書いたりすることが日常ですので、硯もたくさん見つかります。残念ながら書かれた文字そのものは、なかなか見つからないのですが。

虚空蔵山城跡と平場群

殿村遺跡の話はこれで終りにして、次に虚空蔵山城の話に移ります。殿村遺跡は中世の寺院遺跡の可能性が高まってきたのですが、一方で虚空蔵山はその根源となる信仰の山だったということは言うまでもありません。実際に今でも山頂近くに岩屋神社があるなど、かつての面影を残していますし、そもそも山の名前が信仰の山を雄弁に物語っています。この山は会田富士とも言うように秀麗な山容が神々しさを醸し出しているのですが、そんな信仰の山にかぶさるように山城が築かれています。図21の一番上の黒い帯が山頂部分で、峯ノ城という小さな城の平場があります。その下、南の斜面には岩屋神社があり、それから西に秋吉砦や中ノ陣城、さらに西に名前のない砦があって堅堀や平場が残っています。聖地である山に戦国の城が被さるという姿が見られるのですが、一般的に山城というのはこのような高くて遠くや麓を見下ろせる場所、つまり山の頂や尾根の上に造られます。しかし、虚空蔵山城の場合ちょっと不思議な空間があり、そこに注目してみた



図21 虚空蔵山城跡

と思います。

会田と県道風越峠線を結ぶ林道虚空蔵線から中ノ陣に向けて山道を西に入ると、秋吉砦から下る3本の堅堀を通り過ぎた先の谷間に水ノ手と呼ばれる小さな池があります。そこを最上段として谷間に長大な平場が壘壇状に連なっています(図22)。ここは山城としては実に不思議な空間で、私たちとしては信仰の山と谷の奥にある平場群という、城郭というよりむしろ殿村遺跡と同じような寺院跡の可能性が高いのではないかと考え、こゝも発掘調査を実施しました。平場群の位置を見ると、あたかも両側の尾根の上に構えた中ノ陣城と秋吉砦に守られていると言ってもいい立地です。そこに一辺の長さが50m前後、奥行き7m~15m程の平場が6段構えられています。中でも最上段が最も広く、奥行きがありますが、その平場①番と最下段の平場⑥番をこれまで3回にわたって発掘した結果、寺院に関わりそうなさまざまな成果を得ることができました。この平場群は昭和3、40年代まで畑が営まれていたのですが、平場①番を発掘すると地表から3、40cm下でより古い時期の地面が出てきました。そこからは礎石建物跡が見つかったほか、今見えている石垣の内側から古い時期の石垣が顔を出しました。また、中国産の高級な青磁や白磁、儀礼と関わり深いカワラケや、茶道具である天目茶碗や茶壺、さらには文房具の硯まで出土しました。平場群の古い段階におけるこのような遺構や遺物のあり方は殿村遺跡と全く変わらないことが分かったのです。ちなみにここは標高930mの地点です。こんな標高の高いところで、15世紀後半から16世紀の初め頃まで、



図22 虚空蔵山城跡の平場群

礎石建ちの立派な建物を伴って高級な器を使い、喫茶も行って人が生活していたのです。さらに驚かされたことに、当時の溝跡の堆積土を調べたらソバの花粉が大量に見つかったのです。つまり、生活の傍らソバの栽培も行っていらしいのです。いったいその人々は誰なのか気になるのですが、そこでもう一度平場群の立地から考えてみると、標高の高い山の谷奥に平場を構えて、礎石建物や高級な焼物や茶道具などを保有しているとなると、寺院などの宗教施設以外に考えられないとの結論に達するのです。

私たちは、さらに調査を進めた結果、古い段階にはまだ城郭特有の堀や土塁がなかったことが分かりました。寺院だったのなら当然だと言えます。それが16世紀の前半になると大規模に改修されて、整然とした短冊状の平場に壮大な石垣が構えられることになりました。新しい段階の地面は現在までほとんど変わっていないため建物跡は確認ができませんが、平場①番ではかろうじて掘立柱建物跡を捉えることができました。そして、新しい段階の平場を最も特徴付ける遺構があります。それは平場の東を区切る秋吉砦から下りてくる塹壕と土塁がこの段階に造られ、外からの侵入に対して守りを固めるという、非常に城郭らしい構えに変貌するということです。加えて、新段階の平場からは茶道具その他生活遺物が出土せず、生活臭が感じられません。こうしたことから、新段階すなわち戦国時代が深まる16世紀中頃以降の平場は性格がガラリと変わり、寺院から城郭へと性格が変化していったことが考えられるのです。ここまでが虚空蔵山城のお話です。

まとめ

それではまとめに移ります。中世におけるこの2つの遺跡をとりまく景観について、大河内家文書の「文禄3年会田郷往古之略図」を見ると、山麓に殿村、虚空蔵山の中段に会田小次郎の城（虚空蔵山城）が描かれ、城より上位に「鎮守虚空蔵尊」として信仰の中心があります。そして山と麓の会田が道で結ばれている。つまり、山と麓が密接につながっていることを表していることに特徴があると言えます。

麓の会田には町が形成され、小岩井にかけて会田氏の家臣の家などが連なっていたことをこの絵図は語っているのです。もう一つ、堀内家文書の「天正9年御祝いくばり日記」を見てみると、殿村遺跡にあった糸ヶ寺、長安寺、補陀寺、加えて尾根を挟んで東の谷にあった知見寺など、会田にある創建の古い寺院が軒並み記されています。発掘調査成果とこれらの絵図・文書から得られた情報をもとに中世の虚空蔵山麓の景観を模式図に表すと図23のようになります。ここでは、虚空蔵山と並びもう一つの信仰の中心である岩井堂も含めて、2つの聖地を頂点として岩井堂沢が開いた谷がひろげ、盆地を東から西に流れる会田川の低地に臨む、そこにまだ所在がはっきりしないが会田氏の館があり、周辺に寺院が集まっていた。そうした拠点の眼下、会田川に沿った街道筋ならびに会田盆地を貫き岩井堂沢の右岸を北上する古代からの道筋に会田の町が形成され、武士、宗教関係者、職能者などさまざまな人が行き交った。こんな中世の会田のイメージが描かれます。

さらに別の角度からこの景観を模式図に表してみます。図24では虚空蔵山を標高ごとに分解してみました。まず山頂は輝石安山岩の巨大な岩塊、岩場になっていて非常に荒々しい姿を呈しています。その直下には砂岩の岩壁や洞窟があり、古代以来の磐座信仰の場だったのではないかと考えられます。岩屋神社はまさに磐座の一つに鎮座しているのです。このような岩場のある険しい景観は修験者の行場としてよく利用され、虚空蔵山の名も修験との関わりから来ていると考えられますが、この信仰空間の中心部とも言える山頂部の下、標高800mから900mあたりの岩井堂沢や知見寺沢の谷地頭には水場があって、そこに調査をした6段の平場など寺院を思わせる平場が数か所あったことが分布調査で分かってきました。そして、沢を下った山麓に殿村遺跡をはじめとして長安寺や補陀寺、無量寺といった寺院が集まる、このような垂直構造の関係を見ることができます。繰り返すと、山頂の岩場や岩屋神社周辺の磐座が連なる空間があって、その下に山の寺を思わせる平場群があって、そして山麓に里の寺院が展開するといった信仰空間の構成図です。

最後に、殿村遺跡と虚空蔵山城が投げかける石垣の問題について簡単に触れておきます。図 25 は桐原城をはじめ山辺谷にある 16 世紀の山城の石垣で

非常に特徴的です。意図的に割ったか、あるいは節理を利用してはがし取った平石を垂直に 1～3m 程積んでいます。これが城の主郭部を取り巻く

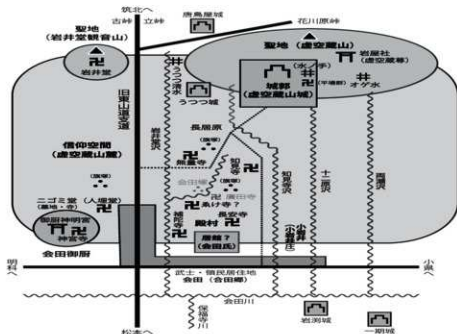


図 23 中世の虚空蔵山麓の模式図

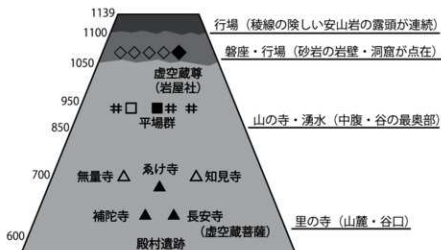


図 24 虚空蔵山における信仰空間の構造 (イメージ)



図 25-1 桐原城跡 石垣



図 25-2 山家城跡 石垣

ように造られています。こうした松本の山城に特有な石垣は、今まで小笠原貞慶が松本に帰ってきた天正10年以後の混乱期に造られたと理解されてきたのですが、しかし誰も正確な年代を明らかにしていません。ところが、平成20年に殿村遺跡の15世紀の石垣が出てきました。これを見て、松本にはまず寺院が持つ石垣技術があった。ならば、山城の石垣技術はその延長線にあると考えられないかと、そんな問題提起がなされました。両者の石垣を見比べると、どちらも近世城郭の石垣に先行する未発達な技術によっている点で共通するが、しかし外見上はあまり似ていないようにも見えます。というのは殿村遺跡の石垣は割った平石は使っていないのです。古い段階では大きな石を起こして連ねる積み方をしているのですが、こういった積み方は山辺谷の山城の石垣には見られません。一方の山城の石垣は、崩落防止のために表に見える石垣の後ろにさらにもう一列石垣が潜んでいて、お互いが噛み合うよう二重に積んでいます。これを私たちは控積みと呼ぶことにしましたが、その技術は殿村遺跡にはありません。殿村遺跡では石垣の後ろはただ土が詰めてあるだけなのです。これらの間に技術的な繋がりがあるのが問題となるのですが、そこで鍵になるのが虚空蔵山城の石垣です。虚空蔵山城の石垣は平石を積む部分があり、控積みがある点で山城の石垣と技法が共通します。ところが、そうした石垣の各所に殿村遺跡の古い石垣のように石を衝立のように立てて使っている部分があります。これは山辺谷の山城の石垣にはない特徴なのです。しかも図26のように最下段に大きく厚い石を据えて、上には薄く平らな石を



図 25-3 林城跡(小城) 石垣

積むというやり方は、この城ならではとっていいでしょう。さらに先ほど挙げたように虚空蔵山城では古い段階、すなわち山の寺の段階に伴う15世紀末の石垣が出土しており、これは殿村遺跡の石垣と同時代のものなのです。ですから、今後それぞれの石垣の構造をもっと詳しく分析していけば、殿村から虚空蔵山城へ、虚空蔵山城から山辺谷など山城の石垣へという流れを描くことができるかも知れず、今後、松本の中世・戦国史を語るうえで鍵になる材料を持っているのが虚空蔵山城であり、殿村遺跡ということになるのです。

最後の最後になりますが、このすばらしい、松本の中世・戦国時代をひも解くカギになる重要な遺跡が、地元の方々の声で保存されました。この遺跡は将来にわたって私たちは守っていかなければなりません。そのためには適切に保存して、歴史資産として幅広く活用していくことが求められます。まだまだこれまでの発掘では遺跡の様子が少し分かっただけでありますが、これからはどう活用していくかということにだんだん比重を移していくこととなります。そのためには行政だけでなく、むしろ地域の皆さんのお力が必要不可欠になります。むしろ地域の皆さんが主役となって遺跡を将来に繋いでいく、私たちがそれを支えていく、そんな姿が求められるのではないのでしょうか。

以上で報告を終りにしたいと思います。ありがとうございました。



図 26 虚空蔵山城跡第3次調査 石垣

殿村遺跡を特徴づける遺物

松本市教育委員会文化財課 福高 彩子・栗田 愛・伊藤 愛

一 茶道具 一

文化財課の福高と申します。この時間では過去9年間の殿村遺跡の調査について遺跡から出土した遺物の中でも殿村遺跡を特徴づける遺物の紹介を、私を含めた3人で行っていきます。

始めに茶道具についてお話しさせていただきます。図1が殿村遺跡から出土した茶道具になります。一口に茶道具といっても様々なものがあります。この中国産の青磁のお碗・中国産の天目茶碗、そして茶壺、そして茶入。天目茶碗、茶臼、風炉などがあります。殿村遺跡では先ほども竹原の方から話がありました、主要な茶道具のうち、茶釜以外は出そろっています。

では、茶の文化はいつの時にやって来たかということからお話します。中国から嗜好品として伝わった茶の文化は禅宗寺院から次第に武士階級の間へと広がってきました。余談ですが、当初、平安時

代の初め頃に日本に伝わってきた当時のお茶は嗜好品ではなく、薬として伝わってきたようです。その効能は二日酔いの改善や眠気覚ましだったようです。確かに効いているような感じがしますね。

さて、殿村遺跡が活動を行っていた室町時代にはお茶の文化がどんどん発達していく段階にあり、その次の戦国時代にいたっては各地の大名たちがお茶の文化を受け入れていきました。その後、花びの茶風が流行してくる16世紀代には全国各地の遺跡からお茶に関わる遺物が出土してくるようになります。つまり、このことは茶の文化が全国に広まったということの意味しています。

そういった茶道具の中でも、殿村遺跡の中でも数多く出土するのが天目茶碗です。この茶碗はお茶を点てたり、飲んだりすることに使用されていたものです。天目茶碗という道具は当時としてはとても高級なものです。その高級品の中でも特に高級なのが、図2の中国産の天目茶碗です。殿村遺跡からは日本の瀬戸産(図3)と中国産の両方の天目茶

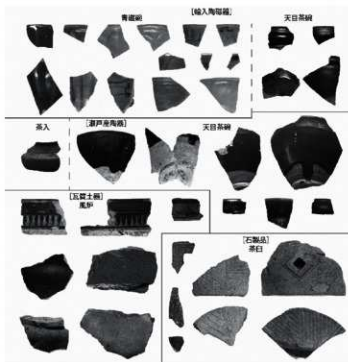


図1 殿村遺跡出土 茶道具

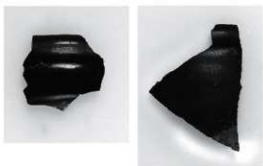


図2 中国産の天目茶碗



図3 瀬戸産の天目茶碗

碗が出てきます。

先ほど、天目茶碗ではお茶を点てたりするといいましたが、その証拠が図4です。茶碗の内側に水平方向に走る無数のひっかき傷があるのですけれども、これはお茶を茶釜で点てた時にできた傷です。底のあたりに横に走る線が見えると思います。また、茶碗の底に漢字で「三」と文字を書いた天目茶碗が見つっています(図5)。これは管理上振った番号なのか、はたまた自分の名前が「三郎さん」だったので「三」を書いたのかは今となっては分かりません。とにかく、こうして文字の書かれた茶器が見つっています。

次は青磁碗についてです。これもお茶をたしなむ際に使われていたとされています。こちらも中国からの輸入品のため高級品です。ここで問題です。図6、図7のどちらのほうが古いのでしょうか。といってもあれなので、ヒントを出します。この2つの青磁碗のかけらにはどちらにも蓮の花が描かれています。図6は花びらの模様を工具で削り出してから釉薬をかけることによって付けています。これを凌ぎといえます。対して図7は花びらの模様を筆で描くことによって付けています。ちなみに凌ぎの方が技術的に難しく手間がかかります。では、正解を発表させていただきます。正解は、皆さんから見て左の花びらを削って付けた方です。時代が新しくなるにつれて手を抜いていく、つまり、表現が簡単になっていくんです。今でいう所の省エネですね。こうした青磁碗の特徴からも、殿村遺跡には13世紀の後半から16世紀代にいたる幅広い時期の青磁がもたらされていたということが分かっています。

次は茶壺についてです。石臼ですり潰す前の抹茶、つまり茶葉を保管するために用いられる壺が茶壺です。その昔は、抹茶を入れる小さい茶入のことを小壺と呼んだことに対して、茶壺は大壺と呼ばれていたそうです。殿村遺跡と虚空蔵山城からは瀬戸で作られた祖母懐茶壺というものがみつっています(図8)。

中国産と日本産の茶道具を比べると、日本産の方が色も作りも温かみがあると感じます。今では中

国産のものは大量生産で安価というイメージがありますが、当時の中国製品は時代の最先端を行く憧れの高級品でした。今でこそ中国はアニメのキャラクター等で日本の文化をたくさん真似していると言われていますが、昔は全く逆で、日本の方が一生懸命中国の真似をしていたんですね。

最初に、私は禅宗寺院とお茶には深い関わりがあると言いました。当時、抹茶を飲むという行為の多くは仏事で用いられるもので、それ以外の嗜みのお茶はお煎茶だったようです。それを示す様に茶臼と風炉は寺院と居館からしか出てきません。風炉というものは茶釜に火をかけてお茶を沸かすための炉です(図9)。石臼はお茶葉を挽いて抹茶にするための道具です(図10)。この風炉や中国産の天目茶碗は、限られた人物しか用いることができないため、権威を示す器具でもあったようです。こうした権威を示すような器具が殿村遺跡から発掘されたことは、注目すべき点であると思います。

では、茶道具の話のまとめに入らせていただきます。殿村遺跡が存在していた時代、お茶は禅宗の文化の中で花開いていました。そして、数ある茶道具の中でも石臼と風炉は使用すること自体が権威を示すような器具であり、殿村遺跡はそういうものが出てくるころだということです。殿村遺跡で活動していた人々は、その当時高級な嗜みであったお茶ができるリッチな人達であったことが分かります。しかも、ただお茶を楽しむだけでなく、そこからさらに茶臼を使って抹茶を引き風炉でお湯を沸かし、中国から輸入した天目茶碗を使って、とても贅沢にお茶を楽しんでいた。つまり、殿村遺跡で活動していた人達は相当なステータスのある人だったということがこの茶道具から分かってきています。以上で茶道具の話は終りになります。ご清聴ありがとうございました。

(福嶋 彩子)



図4 茶釜の痕がある茶碗



図5 「三」の墨書のある茶碗



図6 青磁碗



図7 青磁碗



図8 祖母懐茶壺



図9 風炉



図10 茶臼

一 硯 一

続いて文具、硯を紹介いたします。茶道具のほかにも、宗教施設として殿村遺跡から出土した遺物の中に一般の人達が多く持ち得ず、お寺ではたくさん必要としていたものとしては硯が複数出土しています。硯は毛筆文化には欠かせない文具で、消費地での生活文化を反映する遺物です。また、長期間の使用が可能で手入れを怠らなければ、半永久的に使えるものです。

図 11 は現代の硯で、図 12 が殿村遺跡の 1 次調査で出土した硯です。こうして並べて比較しても現代のものとは形は変わらないかと思えます。装飾されて飾り棚などに飾る硯もありますが、殿村遺跡から出土したものはシンプルで実用的なものばかりです。違う点を挙げるとすれば、写真では分かりにくいですが、素材が違います。現在広く普及している硯は軽量化のためにプラスチック製で、出土したものは石でできています。殿村遺跡からは石製品も多く出土していますが、中でも特徴的なのが図 13 の硯です。出土した硯はすべて破損していて、図 13 の硯の赤い部分は熱を受けて変色した箇所です。殿村遺跡から出土した硯の中にはこのように赤く変色した硯がいくつかあります。

また、注目していただきたいのが図 12 の硯で、鳴滝石から作られています。鳴滝石は京都丹波地方で産出・生産される石です。高級な石材として扱われていて、適度な硬さと吸水性を持つことからノミやカンナ、刀など刃物の研磨に最上とされています。現代では仕上げ用の砥石として使用されることが多いです。そのため、この鳴滝石の硯は殿村遺跡から出土した石製品の中でも特に高級品であると考えられています。今回展示している硯 6 点のうち 3 点がこの鳴滝石を使って作られた硯です。一方、図 13 の硯は在地産と思われる粘板岩を加工しています。粘板岩は防水性・耐久性があり、硯のほかにも瓦や塀などの建築材料にも使われています。

当たり前の事ですが、硯は墨をするための道具です。海に水を入れて陸で墨をすります。現代は墨汁

という便利なものがあるので墨をすることはあまりないかと思えます。そうでなくても日常的に何か文字を書くときにいちいち硯で墨をすって文字を書くこともないかと思えます。現在普及している硯は墨をするのに向いていないようで、墨をするための研磨剤が入っていないものがあるそうです。図 14 はプラスチック製の硯の裏側です。現在の硯の裏側はこんなふう空洞になっています。このように中が空洞で軽いために、一方の手で押さえて墨をするため時間がかかるし力もいるので大変です。一方で、石でできた硯の方は空洞がありませんし（図 15）、プラスチック製のものよりも重量感や安定感があり片手で墨をすることができます。

先程、硯は手入れを怠らなければ長期間の使用が可能と言いましたが、硯は使っていると紙やすりのように、だんだんとすり減ってつるつるになってしまいます。そうすると墨がすれなくなりますので硯用の砥石で面を研いでいくと、また墨がすれるようになります。殿村遺跡 1 次調査で出土した硯の表面の残っている部分や、他の展示している硯の表面の残っている部分を触るとつるつるしていますので、後で触ってみてください。このことから殿村遺跡では硯がつるつるになるくらい日常的に硯や墨、筆が使用されてきたのではないかと思います。今まで文具として硯について紹介してきましたが、今回の展示には今年度の 8 次調査で出土した水滴も展示しています（図 16）。水滴も文具の一種です。墨をする時に硯に注ぐための水を入れる容器で、動物をかたどったものもありますが、今回出土したのは急須の形をしたシンプルなものだったのではないかと思います。

後の報告では今紹介してきたような文具を使って書かれたであろう古文書の話があります。当時を知る手掛りとなる古文書などの資料は現代の調査・研究に役立っています。それらを記す道具の文具は一見地味ですが、とても活躍しているのです。みなさん、ご清聴ありがとうございました。

（栗田 愛）



図 11 プラスチック製の硯



図 12 鳴滝石製の硯



図 13 粘板岩製の硯



図 14 プラスチック製の硯（裏）



図 15 鳴滝石製の硯（裏）



図 16 水滴



とのむらさん
殿村遺跡非公式キャラクター

一 鏡 一

では、次の発表に移らせていただきます。私、伊藤と申します。私が紹介しますのは、鏡です。こちらになります（図17）。この鏡は青銅でできています。青銅鏡です。遺物展示スペースにも展示してありますけれども、直径は11cm。片手で持てるようなサイズですね。重さは350グラム程度。今日、手に取っていただけなのが残念なんです、持つとずっしりして重みがあります。図17は鏡の裏面なんですけれども、模様がいっぱい見えますね。これをひっくり返しますと、表面、姿見をする面になります。今は錆びてしまっているので、当然覗き込んでも何も見えないのですが、当時は綺麗に磨かれて、ちゃんと鏡としての役割を果たしていたんだと思います。

こうした青銅の鏡は、実は日本では弥生時代からあります。弥生時代や古墳時代の鏡というのは、中国で作られて日本にもたらされたもの、あるいは、中国で作られた鏡を日本で真似して作ったもの、の2種類があります。松本では弘法山古墳でこの青銅鏡が出ていて、図18がその鏡です。そして少し時代が先に行ってしまうんですが、平安時代になりますと、中国の影響を受けつつも和風の文様を全面的に配置する和鏡というものが大流行します。これは1100年代～1200年代にですね、日本で非常に多く作られていて、松本でも発見されています。

そして次の鎌倉時代になりますと、擬漢式鏡というものが登場します。これは中国の漢の時代の文様様式を取り入れた鏡で、それで擬漢式鏡と呼ぶんですね。この擬漢式鏡がまさに、殿村遺跡で出てきた鏡なんです。これは室町時代のもので、擬漢式鏡としては新しいタイプになるんですけれども、このように、鏡の縁に沿って文様帯を円形に巡らすのが、中国の漢の時代の鏡の特徴です。

文様の方を詳しく見ていきますと、全体的にうねうねした模様が見えますね。これは流れる水の文様と書いて流水文といえます。この流水文の上に何が乗っているのが見えます。拡大しますと、こん

な感じになっているんですが（図19）、これは桜の花です。水の上に桜の花が乗る、こういうものを「花筏」と呼びます。流れる水の上に桜が浮かんでいる様を筏に見立てて、そう呼んでいるんですね。そして、これは鏡の下の方になるんですけれども、何が写っているか分かりますか（図20）。これは、頭を上に向けた鳥の姿です。言われてみれば鳥に見えるなっていうくらいにしか見えないと思うんですけれども、さらに反対側にも、もう1羽いるんです。こういうふうには2羽の鳥が、向かい合って飛んでいる様子がここに描かれています。

そして図21が真ん中の鈕と呼ばれる部分です。鈕を通す部分なんです、これもよく見ると実は亀の形になっているんですね。鈕の部分自体が甲羅で、頭を下に向けています。上が尻尾の部分になります。

このように花筏があって鳥が飛んでいて、亀の鈕がついていると。こうした文様構成から、鏡の専門家の先生に、この鏡の名前を付けていただきました。「花筏双鳥鏡」。花筏があって鳥がある。この亀の形をした鈕は、擬漢式鏡のなかでは非常に一般的なもので、わざわざ名前に入れていません。こういう2羽の鳥が飛んでいる文様構成というのは、擬漢式鏡のなかには非常にたくさんありまして、そういう鏡にはだいたい双鳥鏡という名前がついています。だけど花筏と付くのは今回、この鏡が初めてです。非常に珍しい文様構成だそうです。

この鏡は、平成27年度の殿村遺跡の第7次発掘調査で発見されました。そこでは、先ほどの竹原の話にもありましたけれども、池が見つかりました（図22）。庭園に伴うであろうという池なんですけれども。鏡は、この池の中の石の下からこんな状態で発見されました（図23）。色んな記録を取って、石と鏡の間の土を取り外したところ、こういったように全貌が明らかになりました（図24）。これで鏡だと確信するに至ったわけです。

この上に乗っている石は、鏡の上に土がどんどん堆積して行って、鏡が全く見えなくなった状態の時に置かれた石なので、この石を置いた人は、この下に鏡が埋まっているなんてことは全然知らなかったかと思います。上から見ると、ここにちょっとだ



图 17 花伎双鸟镜

け鏡が見えてますね(図25)。もしこの石が少しでもずれていて、完全に鏡を覆っている状態になっていたら、この鏡は発見されませんでした。非常に奇跡的な状況で発見された鏡になります。

この鏡がどうして池の中に出てきたんでしょうか。うっかり落としてしまったんでしょうか。それとも、いらなくなったから捨てたんでしょうか。あるいは、何か意味があって池の中に沈めたんでしょうか。その答えは、全国的な事例から推測することができます。山形県鶴岡市に羽黒山という山がありまして、その山頂に神社が建っているんですね。そして、この神社の手前に御手洗池という非常に大きな池があります。この池の中から、和鏡がなんと1000枚も発見されました。うっかり落としてしまったというレベルじゃないですね。捨てたにしても、1000枚も捨てるなんてちょっと考えられません。

というわけでこれは、落としたわけでも捨てたわけでもなく、鏡を池の中に沈めるということ自体に意味があったんです。神聖な池の中に鏡を奉納する、そういった信仰が実際にありまして、水の神に鏡を奉納するということ自体が、祈りの形だったんですね。鏡にはもともと魔除けの力があると昔から信じられていましたから、そうした願いもあったんだと思います。なので殿村遺跡の鏡も、恐らくそういった願いを込めて、池の底に沈められたのではないかと思います。

余談ですが、殿村の鏡は池の底に鏡面を下にして、びったりと置かれていました。その下は真空状態になっていたので、500年前の葉っぱがそのまま腐らずに貼り付いていました(図26)。現在、それを分析に出していますので、結果待ちなのですが、そうした植物などの有機物からも、当時の年代や環境というものを確認することができるんです。

擬漢式鏡が出土したのは、松本では実は今回が初めてになります。こうした貴重な遺物がこの殿村遺跡から出土したということは、地元の方々にとっても、松本市にとっても、そして調査をする我々にとっても、非常に誇らしいことだと思います。

さて、ここまでで茶器、文具、鏡と、色んな遺物の話をしてきましたけれども、いかがだったで

しょうか。

ご紹介した遺物は全て500年前の人達が、実際に使っていたものです。私達は、500年前の人たちに、会うことはできません。彼らの生活の様子を、想像はできても見ることはできません。ですが、こうした遺物を調べることによって、当時の様子を私たちが知ることが出来るんですね。どんなに小さな欠片であっても、非常に大事な資料なんです。また、みなさんも今後、遺物ですか、遺構に触れる機会があると思います。というかあってほしいと願っているんですけども、その時は是非、当時生きていた人々や、かれらの生活の様子、そしてその周りを取りまく風景など、色々考えながら見ていただけたら嬉しいなと思います。

これで遺物のスライドは以上になりますが、この後、遺物展示スペースのほうで休憩も兼ねて遺物の解説を行いますので、質問のある方は来ていただければと思います。どうもありがとうございました。

(伊藤 愛)



図18 弘法山古墳出土 半三角縁四獣文鏡
(長野県宝)



図 19 花筏双鳥鏡 花筏



図 20 花筏双鳥鏡 鳥



図 21 花筏双鳥鏡 鈕(亀)



図 22 殿村遺跡第7次調査 池



図 23 花筏双鳥鏡 出土状況



図 24 花筏双鳥鏡 完掘状況



図 25 花筏双鳥鏡 完掘状況(上から)



図 26 花筏双鳥鏡 取り上げ(表面)

古文書と石造文化財が語る四賀の中世

松本市教育委員会文化財課 宮島 義和

はじめに

みなさん、こんにちは。宮島と申します。私の方からは「古文書と石造文化財が語る四賀の中世」という事でお話しさせていただきたいと思います。まず石造物調査という事で、私、あえて旧四賀村と呼ばせていただきますけれども、旧四賀村という所は松本平ではほとんど見る事ができない中世の石造物が非常にたくさんあります。その多くは信仰に関係する石造物でございまして、いままで話に出てきましたように非常に信仰の色が強い殿村遺跡を中心にして、一帯に信仰的な石造物がたくさん集まっている。

そんな四賀村について殿村遺跡の調査事業の一環として、平成27年、平成28年度の2か年で石造物の悉皆調査を行いました。悉皆調査につきましては、石造物をお持ちの方、あるいは墓地を管理されている方、墓地をお持ちの方に色々無理なお願いを申しあげまして調査させていただいたんですけれども、皆様気持ちよく調査させていただきまして、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

四賀の中世石造物

こんな石造物調査を細かくやっていったわけです

けれども、その調査の結果、ここに示しましたような主に4種類の中世の石造物があることが分かってまいりました(図1)。どんな石造物があるかと言いますと、まず宝篋印塔という非常に華やかな石塔ですね。それからご存じ五輪塔といいます。四賀地区の方はこういう石塔類をひっくりめまして五輪様と呼ばれる方が多いんですけれども、本来五輪塔というのはこういう形をした石塔です。それから、石塔として存在するのは非常に珍しいと言われる多宝塔という石塔がございまして。それから、これが非常に印象的なんですけれども、無縫塔といまして、ここが卵形をしているので別名卵塔といまして。この無縫塔という石塔がございまして。大きく分けてこの4種類の石塔があることが確認出来ました。

ただし、きれいに完形で残っていることはほとんどございませんでした。ではどのように調査していくのが。各石塔の部材、例えば宝篋印塔と言いますと、相輪という部材だけがある場合、あるいは屋蓋と呼ばれる部分だけが残っている場合、特によく残っているのは五輪塔の上の空風輪という部分です。こういうものを部材ごとに分けて、部材を一個づつ調査をしていくことにいたしました。

その結果、中世の石造物を183点確認すること

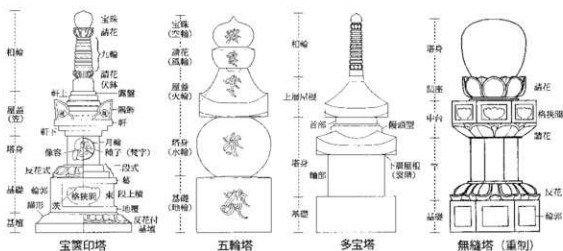


図1 中世石塔の種類

ができて、その内3点だけ茶白とか石白とか入っています。そういった生活用具を除きまして180点の仏教信仰に関わる石塔の部材があることが分かりました。180点の部材ですね。その部材の内訳は、こんな内訳になっています(表1)。これを見ていただくとよく分かると思います。宝篋印塔の部材が全体の64%を占めています。五輪塔の部材が26%ですので、ちょうどあわせて宝篋印塔と五輪塔で90%を占めていることが分かります。そのほか無縫塔とか多宝塔ですね。多層塔というのは1個だけちょっとはつきりしないものがありまして一応1%として入っております。そのほかに昔から四賀で出たというふうに伝わる板碑、これは松本市立博物館に展示してありますが、これを含めます。それから、石仏が1つあります。これらを合計すると180点になります。

特に宝篋印塔というのはそうですが、どんな石材でできているかと言いますと多孔質安山岩という黒い軽石に近い石材でできています。これは殆どまったく四賀の地区には存在しない石材なんですね。どうも、これはかなり高い確率で浅間山の溶岩でできた石だと考えられます。よって、東信地方から製品として搬入されてきたと考えられます。そして製品として搬入するわけですから、当然の如くそれをお金で買うわけですね。特にさきほど見ていただきました中で宝篋印塔の割合が一番高い。見ていただいた通り、宝篋印塔というのは一番作るのに手間がかかる。そんな宝篋印塔を四賀の人達はそれを進ん

で買っていたことが分かるんですけど、それは普通の人が買えるものではないのではないか。ではどんな人達か。それなりに力を持った人達なのではないだろうかということで、わたしは会田の地を含めた四賀地区を治めていた武士の階級に目を向けてみたいと考えました。そこで今日は、これから紹介します代表的な石塔と、その時代に存在した武士を史料を追って見ていくことにしたいと思います。

14世紀の石塔と武士の関わり

まずは石塔でございませけれども、実は衝撃的な事がございます、次にパッと出ます。これございませうでしょうか。保福寺のおんば様という石塔なんですけども(図2)。おんば様というのは話に聞きますと、金太郎のお母さんという説があります。山姥の伝説もあるということで山姥の信仰に関わるものとして、特に安産の神様として昔から拝まれていたものと言われていますが、今ではほとんど誰も拝むことがなくなったものです。四賀村には『四賀村の石造文化財』という立派な本があります。その中にも保福寺のおんば様と紹介されていた石塔なんですけど、実はこれは金太郎のお母さんではなかったわけです。これは14世紀の前半、鎌倉時代の終り頃、後期頃と推定される時代のお坊さんの墓石あるいは、供養塔であることが分かりました。これが先程紹介した一番右側にありました、無縫塔という分類の中に入る石塔です。

時代的に考えまして現在、保福寺は曹洞宗のお寺

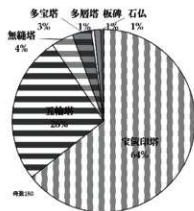


表1 部材の割合



図2 保福寺無縫塔

なのですが、かつて鎌倉時代、伝承によりますと文永の5年でしょうか、1268年ですね。長安寺と同じように大覚禪師（蘭溪道隆）によって開山されたこと伝えられておりまして、この無縫塔は開山した僧侶の塔ではないかと考えられるわけです。ただし、蘭溪道隆が直接埋められているわけではなくて、蘭溪道隆みたいな人は名前をいただいて開山しているのであって、その時に実質的に保福寺の開山に関わったお坊さんのものではないかと今考えています。

そういうように非常に貴重な石塔であったことが今回の調査で分かりまして、14世紀の前半という時期に四賀地区の石塔の信仰が始まってくるわけですが、14世紀前半という時期にはどんな人が四賀地区にいたのかなということ、古文書をひも解いていきますと、『守矢文書』、これは諏訪社の神官でございますけれども、『守矢文書』の中の「鎌倉幕府下知状案」という嘉暦4年、1329年、14世紀前半ですね。鎌倉幕府ももう滅亡しようかという頃の鎌倉幕府から出された諏訪社の祭りの頭役を勤める順番を記した文書の中に、会田御厨海野信濃権守入道以下という人物の名前が登場してきます。会田御厨、海野、信濃権守入道。海野という姓を名乗っています。そして信濃権守という、言ってみれば当時それ程力はないのかもしれませんが、信濃の国司の一つであります。そして入道ですから、これは何かと言いますと、お坊さんですね。出家しています。重要なのは、海野信濃権守入道だけでなく以下に人々はまだいるわけですね。こういう人たちが諏訪社の祭りの頭役に指名されているわけなんです。鎌倉時代末期、会田御厨を支配する海野氏以下の人々の存在がこれで確認できます。会田は鎌倉時代までには成立した伊勢神宮内宮の荘園なのですが、その範囲やどんなものを上納していたのかについては、分かっていません。鎌倉時代に東信から海野一族が入ってこの会田御厨、私達のこの地域、会田御厨を支配していたことがはっきりとわかる最初の史料が、『守矢文書』の「下知状案」なのです。

そして先ほど無縫塔はお坊さんの石塔と紹介しましたが、この14世紀前半には他にどんな塔が造られていたかという。これでございますね。図3は、

沢屋の金子家の墓地を調査させていただいた時の写真です。これだけだと分かりづらいのですけれども、多宝塔なんです。これを図にして復元してみますと、こんな塔になります（図4）。残っているのは下の部分の屋根（下層屋根）です。その下に塔身があって、基礎があるというふうになっています。下層屋根の丸く突き出した部分を頭頸型と呼ぶそうなんです。これが多宝塔の大きな特徴でして、皆さんのお庭などにもし、同じものが転がっているぞということがありましたら、是非教えていただきたいと思います。

多宝塔には点線で孔が開いていることを示しています。塔身の部分に孔を開けているわけです。これはどんな孔かと言いますと、恐らくお骨を入れたものではないかと言われています。こちらのお宅のものからお骨は見つからなかったのですが、お骨を入れる孔の事をくわん籠孔と呼んでいます。これが、14世紀前半の四賀地区を代表する多宝塔という石塔です。それからもう一つ、14世紀前半、両瀬の中原さんのお宅の墓地から出てきました五輪塔でございます（図5）。五輪塔は下から地輪、火輪と呼んでいきますが、これもやはり復元してみますと、こんな立派な塔になります（図6）。14世紀前半ですね。鎌倉時代の終り頃から南北朝にかけてになるかと思えます。この五輪塔は大変立派です。この五輪塔の特徴は丸い線が引かれていることと、中に文字らしきものが見えることなんです。これは水輪の丸い部分の両脇と後ろにも書かれているんですけども、丸く描かれた部分をげん月輪と呼んでいます。そして月輪の中に書かれた文字をしよ種子と呼んでおりますけれども、多くの場合は梵字ですね。インドから伝わったサンスクリットの文字が書かれています。こんな形で14世紀に石塔文化が始まった様子が分かります。これが14世紀の後半に入りますと、先ほど言いました、四賀地区で一番たくさん見られる宝篋印塔が登場してまいります。

これは中北山の五輪平で、木下辰男さんに許可をいただいて調査させていただいた宝篋印塔です（図7）。これも形が分かりにくいので、復元した図を出してみます（図8）。こんな立派な塔になります。



图3 金子家多宝塔



图4 金子家多宝塔



图5 中原家五輪塔



图6 中原家五輪塔



图7 木下家宝篋印塔

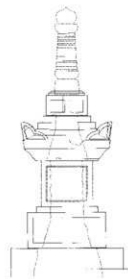


图8 木下家宝篋印塔

残っていた部分がひっくり返ってしまって、これが
屋蓋です。この宝篋印塔の大きな特徴は、ここに点
線で示しています。真ん中の塔身の部分は、近世に
抜けちゃって変えられています。復元しても多分そ
うだと思のですが、この露盤という石の部分に穴
が開いて、ずっと続いているんですね。基礎の部分
から基壇を抜けて、その下の土の中まで穴が続いて
いるんですね。これはどういうことかと言いますと、
下まで貫通している奉籠孔。この塔は、一人の人間
のためだけの塔ではなくて誰か亡くなる度に、奉籠
孔の一番上からお骨を下の中まで入れるために、孔
が貫通している、集団の納骨塔ではないのかと考え
られるわけですね。これが五輪平にありました宝篋
印塔です。

この親分みたいな宝篋印塔が、実は上田にござ
います(図9)。真田町の傍陽に、実相院というお寺
があります。それに貞治6年というふうに記念の銘
が刻まれています。貞治6年、1367年、すなわち
14世紀後半です。これも和尚さんの話ですと、下
まで孔が続いている。集団納骨塔だと言われていま
す。先ほど、東信地方から運ばれてきた話をしまし
ましたが、宝篋印塔の形を見ても、東信地方と非常に
近い形をしているということが、よく分かると思
います。

こんな14世紀の時代、四賀地方にはどんな武
士たちがいたかと言いますと、14世紀の一番最
後の時期になるんですけども、資料をお見せし
ます(図10)。ちょっとやたら字ばかり並んでい
て、なんのこっちゃという状態ですが、14世紀の
末、大塔合戦おほいたががっせんという戦争が起こります。応永7年、
1400年ですね、信濃守護小笠原長秀軍と信濃守護
に反対する国人たち、守護になったことを認めない
ぞと考える国人たちが、大文字一揆という人々と団
結して戦いを繰り広げるんですね。トランプ大統領
と、それに反対する人々が戦いを続けているような
感じです。その中にその戦いを描いた『大塔物語』
という本が、江戸時代に写本として存在しているん
ですが、ここを見てくださいと海野、海野宮内
少輔幸義、舎弟に中村弥平四郎、ここからですね。
会田岩下・大草おほくさ・飛賀留とびがら・田澤・塔原という名前が

出てくるんですね。

大草については、詳しいことは分からないので
すが、会田岩下、岩下氏が入っている。飛賀留と言
えば光六郎の飛賀留、田澤と言えば田澤四郎の田澤、
塔原と言えば塔原三郎の塔原、こんな人々が国人の
海野幸義に従って、大塔合戦に小笠原長秀の敵とし
て参加していることが分かります。これが14世紀
の状況でございます。

15世紀の石塔と武士の関わり

そして、時は15世紀に入っていきんですけども、
15世紀は前半になります。前半は非常に石塔
が多く作られていく展開期、というふうを考えられ
ていますが、どんな石塔があるかと言いますと、例
えば、赤怒田の矢花さんのお宅で調査させていただ
いた宝篋印塔なんですけども(図11)、これも塔
身の部分が抜けておりまして、塔身の部分を入れて
復元するとこんな形の塔になります(図12)。これ
を見ていただきますと、その下に点線で、山のような
線が描かれています。これは要するに基礎の部分
を、下から彫り込んでいるんですね。すごく大きな
穴が開いています。

なんでそんなことをすると思われませんか。そうで
すね。要するに、これは石の重さを軽く押さえてい
るんですね。これを重量軽減孔と呼んでいます。何
でこれだけの孔を開けて、軽くする必要があるかと
いうと、運ぶからです。峠を越えてやはり東信地
方から運ばれてきたであろうことが、これでよく分
かるわけです。運ばれてきた。こちらの方でそれを
購入していたというわけです。その他、赤怒田の小
椋さんのお宅の宝篋印塔、にごみ堂などに15世紀
前半のものがあります。

残念ながら、15世紀前半に活躍していた武士の
名前を示す史料がございません。見つからないん
ですね。途絶えちゃったのかと言いますと、途絶え
ちゃったわけではありません。単純に史料が無いと
いうだけでありまして、その後、石塔文化のピーク
を迎える15世紀後半になりますと、人がワッと出
てきます。皆様のお手元の資料にも載っていますけ
れども、『諏訪御符礼すわみまのりの古書』と呼ばれる諏訪大社

の15世紀の間の55年間について、お祭りの頭を勤めた人々等の記録が書いてある史料があります(図13)。『諏訪御符札之古書』。その中に会田の人として岩下入道、入道ですから出家していますね。沙弥、これ私読めません。重い何。享徳4年、1455年。15世紀中頃ですね。それから7年後になりますが岩下入道、やはり同じなんです。三河重阿という人物が登場してきます。そして、どうも自分考えますに、この2人の名前はよく似ているんですね。記録ですから、本人が書いたものじゃありませんので、もしかすると同一人物かも知れない

と思っています。この人達が、会田の当主として登場してきます。

その次に、当主として岩下海野満幸という人が登場してきます。岩下海野と呼んでいまして実はこの人、諏訪の上社の頭役を勤めるのですが、その前に応仁元年ですから、応仁の乱が始まった年に海野の対戦で討ち死にしまして、この人の息子の2歳の子どもが頭役を勤めると書いてあります。この人が岩下海野満幸。戦死してしまいます。そして、その後僅か7年後になりますが、海野岩下増寿丸、と呼んでよろしいんでしょうか。代初めなりと登場



図9 実相院宝篋印塔(真田町)

益、藏人麻績山城守浦野式部、丞都合其勢五百余騎打出屋代城、篠井岡取陣、伴野並賀望月櫻井高沼洲吉小野澤皆加二一手、其勢七余騎、上嶋取陣、海野宮内少輔幸義弟中村、弥平四郎會田岩下大葦飛賀留田澤塔原深井土肥矢嶋以下、引率、其勢二百余騎、山王堂取陣、高梨薩摩守友尊者嫡子椿、原次郎次男。

図10 『大塔合戦』部分



図11 矢花家宝篋印塔

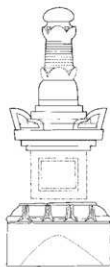


図12 矢花家宝篋印塔

岩下入道沙弥重何(享徳四年・一四五)
岩下入道三河重阿(寛正三年・一四六二)
岩下海野満幸(応仁元年・一四六七)
海野岩下増寿丸(文明六年・一四七四)
海野下野守氏貞(文明十一年・一四七九)

図13 会田氏当主
(『諏訪御符札之古書』より)

してきます。おそらく、この岩下海野満幸の息子が7年経って、この時9歳で増寿丸という幼名を使って、お祭りの頭役を勤めたと考えられます。さらに5年後になります。海野下野守氏貞という人物が登場してきます。文明11年です。まったく名前が違うんですが、私、密かに思っているんですが、この増寿丸が元服します。ちょうど14歳ですね。そうすると、きちんとした諱をもらって海野下野守氏貞になったのではないかなど考えています。証拠はありません。すべて頭役を勤めているのであります。

頭役というのは実際、何かと言いますと、お金を払うんですね。例えばお金を20貫30貫払います。20貫30貫というお金がどれ程のものか、よく分からないのですが、私、天正6年のお米の相場が1貫文いくらかという事を割り出したことがあります。天正6年ですから、16世紀後半になりますけれども、その時は一貫文約10万円です。この時は15世紀、100年も前の事です。それが当てはまるかは分かりませんが、海野岩下さんは20貫という頭役を勤めています。最後の氏貞さんは30貫という頭役を勤めています。もし、一貫約10万円だとすると、200万、300万というお金を使っています。非常に経済力を持っていたことが分かります。

15世紀後半、実にたくさんの宝篋印塔を始めとする石塔が造られます。そして、名字を見ましても海野岩下、岩下海野、東信地方との繋がりがはっきり見て取れるわけです。さて、当時どんな石塔があったかと言いますと、宝篋印塔の相輪の完形品です。原山の塩沢の藤本さんのお宅にあるもので、今は市川恵一さんが保管されていますが、宝篋印塔の頭の部分がほぼ完形で残っています(図14)。15世紀後半のものです。図にすると、図にしない方が良かったのかなと思っちゃいますが、宝篋印塔の相輪でございます(図15)。この宝篋印塔の相輪も東信地方とつながりがありまして、真田町の日向畑遺跡で出土した宝篋印塔の相輪も、こんな形をしています(図16)。特徴的なのは、宝珠の下に首があるんですね。これを篠首しのくびといいます。請花うけはながあって、九輪が刻まれています。請花うけはながあって、伏鉢ふしはちがあるという形になっています。

図15と図16を比べると、図15の方が篠首が短いんですが、両方とも同じような形態をしていて、非常につながりが深い様子が見て取れるわけです。15世紀後半、宝篋印塔のすばらしい良い形を残しているのが、これです。明科に飛びます。明科の光の宗林寺にあります宝篋印塔です(図17)。石川数正の供養塔と言われていますが、それよりもずっと古い15世紀後半のものでございます。図にしますと、こんな形です。これを見て分かりますように、重量軽減孔が彫り込まれています(図18)。これが、15世紀後半の様子なんです。

16世紀の石塔と武士の関わり

そして、16世紀を迎えるわけですけれども、16世紀は、前半が実は中世の石塔の最終末期と言ってもいい時代になります。以後、先ほど言いました中世石塔の大事な石材だった多孔質安山岩というのが、手に入らなくなっていきます。16世紀前半と言いますと、これです。上手うへの川久保さんのお宅の石塔なんですけれども(図19)、石塔が積まれている中の宝篋印塔の基礎には、銘文が刻まれています(図20)。これは非常に重要です。

『四賀の石造文化財』でも読まれていたけれども、私も一生懸命読みました。拓本をとっていただき、文字を解析しました(図21)。名前で征右衛門、その下に字があるので、もしかすると尉の字があるかもしれません。征右衛門尉。ここに年代が書いてあります。『四賀の石造文化財』と同じように、やはり天文2天と読めます。天文2天という言い方するんですけれども、これは天文2年の事です。これは1533年です。青い心・、青心、妙なんとか、これは夫婦ではないかと言われているけれども。最後に本来なら、巳にならなければならないのですけれども、己になってしまっけ書き間違えなんけれども、巳の四月の廿日、巳だと天文2年なんですね。天文2年は巳の年なんです。これが中世石塔の最終末期の宝篋印塔としても、貴重な資料です。

そして、天文年間、天文22年に武田晴信が、信玄ですね。いよいよ進攻してまいります。そして、状況が大きく変わっていきます。天文22年に武田



图 14 藤本家宝篋印塔



图 15 藤本家宝篋印塔

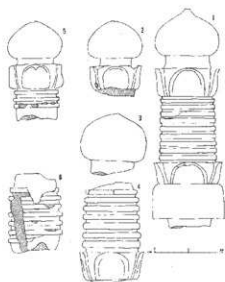


图 16 日向畑遺跡の宝篋印塔 (真田町)



图 17 宗林寺宝篋印塔 (安曇野市)

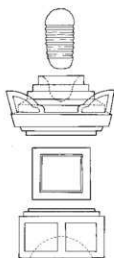
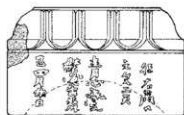


图 18 宗林寺宝篋印塔



图 19 川久保家宝篋印塔



上 图 20 川久保家宝篋印塔基礎

下 图 21 基礎銘文

晴信は刈谷原城を攻めまして、会田虚空蔵山まで放火します。会田一党の塔ノ原城も自落しまして、会田は武田の支配下に入ります。この際、武田の家臣になって起請文を提出した人々と、伝承によりますと武蔵国へ脱出した人々がいたと、言われております。現在の埼玉県の越谷市には、会田を名乗る家が200軒以上あるそうですけれども、会田には会田を名乗る方は、いらっしゃいませんね。ただ海野さん、岩下さんはいらっしゃいます。武田晴信が進攻してきたことは、中世石塔の最終末期に大きく関わるかもしれません。信濃に入った武田晴信がどんなことをしたかと言いますと、独自の宗教政策を開始します。それは、どういうことかと言いますと、諏訪大社の上社の祭祀を、再興するということを行うわけです。

『諏訪大社文書』の「武田信玄諏訪社上社造営再興次第」という文書なんですけれども(図22)。ここには、「諏方上宮末社」と書いてあります。この四賀地区にも諏訪神社がありますね。全部、諏訪大社の末社になるわけです。重要な部分だけ見ていきますと、祭祀再建をしていくので旧規、昔の決まり事をたずね探してその百廢、全部ぶっ壊れてしまったものを再興しなさい。要するに、諏訪大社の祭祀を皆どおりに戻しなさい、というふうに命令を出すわけです。信濃全国に命令を出すわけですね。そして、各所から負担金を徴収するわけなんですけれども、こんな形で負担されていきます。

例えば、これですね(図23)。「大宮御門屋の造宮料、海野、真田、矢沢、祐津、右四ヶ郷の役として造立仕り来るの旨本帳に描き載すのところに百姓等難渋す。ここに下知を加うる次第」ということで、大宮御門という御門を造営するのは、海野、真田、矢沢、祐津だということで命令を下すわけです。そして、その間にいくら出せよと命令文に書いてある。最後に「追って夫用道銭と号し、會田五ヶ條より納む。」ということで、刈谷原・明科・塔原・会田・田沢、これを会田5ヶ條と呼んでいるわけです。ここでお気づきの方もいるかもしれませんが、15世紀までお祭りのお金を徴収するのは、武士に対してでした。ところが、ここでは武士の名前

は出てきません。郷に対して命令を下しているわけです。ここが違うところでね。

最後になりますけれども、16世紀後半になってきますと、郷という村のあり方が非常に重要になってきます。郷の人々は、その郷に鎮守が必ずあります。諏訪社だったり、お寺だったりしますけれども、その信仰を大切に、人々はその鎮守に結集して、戦国期を乗り切っているわけですけれども、戦国大名は郷に対して年貢を要求したり、金銭を要求したり、するようになっていくわけです。

そして、16世紀後半に石塔文化が終りまして、石造物で16世紀後半に入りますのは、この無量寺の無縫塔でございます(図24)。図にすると、こんな形です(図25)。この無縫塔は、鎌倉後期の物と比べると、だいぶ塔身が長くなっている状況が分かります。こんな無縫塔、近世的な形に変わってきますけれども、2点、無量寺にあるだけで、中世の石塔は終りを告げるということになります。

最後に、皆さまの資料に表が載っております(表2)。地域的な石塔・部材の内訳が載っております。その後、色々、写真や図を載せております。報告書も出ますけれども、手に入らない場合も多々ございますので、こんな写真等も参考に見ただけだと思えます。こんな感じで、四賀の中世というのは石塔から見ても、古文書から見ても、宗教の色が非常に強い、そんなところだったんだと。そんな単純な感想しか持てませんけれども、中世の石塔と古文書に関する武士についての情報をお伝えしたところで、私の話は終わらせていただきたいと思えます。どうも、ご静聴ありがとうございました。

一大宮御門屋の造官領、海野・真田・矢澤・
 赤津、右四ヶ郷の役として造立任り来るの
 旨本帳に描き載すのところに、百姓等難決
 す、ここにより下知を加うる次第

(中略)

追って夫用道銭と号し、會田五ヶ條より納む

正物合志貫七百文 苜屋原

正物合志貫七百文 明科

正物式貫文 塔原

正物五百文 會田

以上 多澤

「諏訪大社文書」永祿九年

(一五六五)九月 武田信玄諏訪社上社造営再興の次第

諏方上宮末社、同じく祭祀退転の儀、
 旧規を尋ね捜しその百施を興す、し
 かるに社寺等所望の意趣は帯び来た
 らしむるのところに古文に判行を加
 うれば、社家の青甕となし、後代に
 おいてこの規則を守るべきの由、請
 に任ずものなり、
 この時永祿九丙寅年九月三日

図 22 諏訪大社文書

図 23 諏訪大社文書



図 24 無量寺無縫塔



図 25 無量寺無縫塔

地区	地点数	宝篋印塔 部材	五輪塔 部材	多宝塔 部材	無縫塔 部材	板碑	多層塔 部材	石仏	その他	計
四賀	錦部	4	6	2	0	4	0	0	0	12
	中川	12	16	7	1	0	1	1	0	26
	会田	7	35	24	4	3	2	0	1	69
	五常	6	41	9	1	0	0	0	2	53
周辺	明科	4	18	5	0	0	0	0	0	23
計		33	116	47	6	7	2	1	3	183

表 2 地区別部材数

殿村遺跡とその時代Ⅶ

—平成 28 年度発掘調査報告会の記録—

発行日 平成 30 年 5 月 31 日

発行者 松本市教育委員会

〒 390-8620

長野県松本市丸の内 3 番 7 号

印刷 交文社印刷株式会社
